

# 共起語から見るポルトガル語の直説法未来/過去未来と直説法現在/過去

鳥越慎太郎

TORIGOE Shintaro

## 1. 背景と研究設問

### 1.1. 「直説法」未来と過去未来

はじめに、本研究はポルトガル語の直説法未来と過去未来の直説法性についての疑問を研究動機としている。「直説法未来」と「直説法過去未来」とされる形式が意味論的に直説法という叙法カテゴリーに属すべきなのかという議論は、ポルトガル語文法ではあまり目にする事ができないが (e.g. Cunha & Cintra 1984/2007, Oliveira 1985)、スペイン語文法においては歴史があり、本節ではスペイン語での先行研究をレビューしていく。未来の時間概念が本質的であり法的意味は比喩的用法にすぎないとする Bello (1847/1988) 以来の直説法説支持の考え方は、20 世紀後半以降主流となっているが (e.g. Gill Gaya 1943/1961, Castronovo 1989, Rojo y Veiga 1999, 和佐 2005, etc.)、近年では法的側面から両形式を非直説法叙法として提案している研究者も見られる (e.g. 出口 1986, Alarcos Llorach 1994, Klein-Andreu 1995, 寺崎 1998, etc.)。本稿ではこの議論に関しては踏み込まないが、両形式が時間概念か法概念のどちらかに属するのではなく、どちらにも属するという連続体的で柔軟なとらえ方 (cf. Fleischman 1982/2009) が妥当であるとする。

一方で構造的側面からの直説法未来/過去未来の直説法性の説明として、(1)に示すように、両形式が動詞の補語となる従属節動詞として現れる場合の主節動詞語彙が、従属節動詞が直説法現在、完了過去、未完了過去 (以降「直説法現在/過去」と呼ぶ) となる場合の主節動詞語彙と共通であり、従属節動詞が接続法となる場合とは異なるという、こちらも Bello (1847/1988) 以来の古典的なものがある。前述の非直説法叙法を主張する各研究からもこの点への反論は見られず、これが今日に至るまで直説法未来/過去未来を結局「直説法」に分類させている強力な説明のひとつとなっていると見られる (Castronovo 1989)。

#### (1) Parece que llueve.

Parece que anoche llovió.

Parece que mañana lloverá.

Ayer me pareció que hoy llovería.

Dudo que continúen todavía las negociaciones.

Dudé que continuasen todavía las negociaciones.

\*Dudo que continuarán todavía las negociaciones.

\*Dudé que continuarían todavía las negociaciones.

(Bello (1847/1988, #452) の例文を整理。下線とアスタリスクは筆者による)

しかし、上に示されるように両構造における主節動詞語彙群はまったく共通なのだろうか。先行研究で説明に用いられている例文は出所が明記されておらず、少数の用例からネイティブスピーカー (NS) が直

感によって判断している。一方で、近年の大規模な客観的言語データから言語事実を記述する立場からは、NSの直感のみに頼った文法判断の信頼性は低いとされる (McEnery, Xiao and Tono 2006)。そこで本研究では大規模な言語データを用いて主節動詞語彙を量的に分析し、構造的説明の妥当性を検証していく。分析のアプローチには Hunston & Francis (1999) の Pattern Grammar の考え方を援用する。

## 1.2. Pattern Grammar

Pattern Grammar (以下 PG) は Hunston & Francis (1999) によって提唱されている、コーパスに基いた言語記述アプローチである。1950年代の Hornby (1954, reviewed in Hunston & Francis) や、70年代以降の語彙中心主義 ('lexical phrases', Hunston & Francis)、90年代の Sinclair (1991, reviewed in Hunston & Francis) の流れをくみ、語彙と構造の依存性に着目する。また、上記の先行研究と同様に言語指導や教材、辞書開発を目的とし、PGをもとに *Collins COBUILD Grammar Patterns* シリーズが刊行されている (Hunston & Francis ch.1)。

PGは主に2つのアプローチからなる。ひとつは各語彙が共起するパターン (*pattern, collocation, structure, etc.*) の情報を格納しているという、'lexical phrases'や Sinclair を踏襲した観点 (*from item to environment*) である。例えば Hunston & Francis (p38) では、動詞 *explain* を Bank of English コーパスで検索し、コンコーダンスのサンプル 50 例が、名詞や疑問詞、*that* 節や前置詞 *about* や *to* が後続している文で占められていることを確認し、*explain + n, explain + wh, explain + about + n, explain + to + n, explain + that* などを *explain* のパターンとしている (pp.45-46)。このように、内容語、機能語ともに、すべての語彙にはパターンがある。

もうひとつは各パターンが共起する語彙の情報を格納しているという 'grammar pattern' の考え方 (*from environment to item*) である。Hunston & Francis (pp.43-44) の例では、V + *over* というパターンを Bank of English で調べている。前置詞 *over* を検索し前方一致する動詞をリストすることで幅広い範囲の語彙を得て、さらにその中から *argue, bicker, disagree, fight, quarrel, wrangle* といった類似した意味グループを抽出している。このようにパターンの持つ意味を、共起する語彙群とともに明らかにすることによって、'lexical phrases' や Sinclair のような個々の語彙におけるパターンの羅列ではなく、「一般化」を目指すという点で 'grammar' としての側面を際立たせている (Hunston & Francis, p.77, 86)。

パターンの定義は Hunston & Francis (p.37) によると、「ある単語と規則的に結びつき、その意味に寄与するすべての語や構造」とされる。そのため、語彙と共起するものがすべてパターンというわけではない。例えば、どのような名詞句とも共起する関係詞節や、時刻や方法、様態を表す副詞節や前置詞句などはパターンとは見なされない。ただし、この規定は必ずしも厳密とはいえない。上の定義では「規則的に結びつく」とされるが、重要なのは頻度よりも依存度であるとされ、その判定が困難であることは Hunston & Francis も認めている (p.76)。また、パターンとは見なされないまともにも、中心語句 (*node*) を広げることによってパターンとなる場合もあるとされる (p.78)。本研究では (主節動詞) + *que* + (直説法未来/過去未来) という語彙と文法の共起関係 (*Colligation*, McEnery et al. 2006) を意味のある、特定語彙が結びつくパターンであると想定し分析を進めていく。

### 1.3. 研究設問

本研究では $v_1$ (主節動詞)+*que*+ $V_{\text{fut/cond}}$ (直説法未来/過去未来)と $v_2$ (主節動詞)+*que*+ $V_{\text{pres/pret}}$ (直説法現在/過去)という2つのパターンにおいて、 $v_1$ と $v_2$ の分布傾向は共通であるのか、さらに、 $v_1$ と $v_2$ の傾向が異なる場合、それぞれに何らかの意味的な傾向が見られるのかを、パターンから語彙、語彙からパターンの両観点から記述して探っていく。

## 2. 方法論

### 2.1. Sketch Engine

本研究ではポルトガル語データの検索に Sketch Engine を用いる。Sketch Engine (以下 SkE) は Adam Kilgarriff 氏らが開発した商用のオンラインコーパス分析システムであり、<sup>1)</sup> 研究や指導、辞書開発などに広く利用されている。19 言語の 26 コーパスをプリセットし、加えて自作のテキストデータをインポートしたり、条件指定されたウェブサイト群を検索してウェブコーパスを作成することもできる (WebBootCat)。また、TreeTagger などの品詞タグ付与プログラムも実装し、多言語に対応している。分析機能も多彩で、KWIC コンコーダンスや共起語リストを出力するだけでなく、共起傾向が類似した単語のリストや (Thesaurus)、動詞の主語や目的語、名詞の述語動詞など、共起語を構造や品詞別にリストする機能もある (Word Sketch)。検索は表層形のほか、見出し語や品詞タグ、または正規表現を使って行うことも可能であり、検索したコンコーダンスラインをさらに条件指定して絞り込むこともできる (Filter, Frequency)。

なお、ポルトガル語のコーパスシステムは他にもリスボン大学語学研究所の CONCOR <sup>2)</sup>や、Linguatca <sup>3)</sup> の AC/DC、Davies & Ferreira の Corpus do Português <sup>4)</sup> などがあるが、SkE は上記の Filter や Frequency による再検索を重ねて抽出データを絞ることが可能であるために採用した。ただし、SkE 内のポルトガル語コーパスは品詞タグが精密でない上、SkE は検索機能によっては見出し語検索しか受け付けない制約があるため、ポルトガル語で形態素を扱う際は十分な力を発揮できない感も否めない。

### 2.2. コーパス

本研究で分析するポルトガル語データは Linguatca が開発した Cetempúblico と Cetenfolha で、いずれも SkE にプリセットされている。Cetempúblico はポルトガルの全国紙 Público の 1991 年から 98 年にかけてのデータ約 1 億 8000 万語から、Cetenfolha はブラジルの地方紙 Folha de São Paulo の 1994 年のデータ 2500 万語からなるコーパスである。両コーパスとも、Linguatca のウェブサイトからダウンロードできるオープンコンテンツであり、SkE では 2010 年 5 月現在、合計 6600 万語 (内訳は明記されず) がセットされている。

### 2.3. 検索方法

#### 2.3.1. $v_1 + que + V_{\text{fut/cond}}$

本調査では従属節動詞として出現する直説法未来/過去未来に先行する主節動詞語彙を検索する。なお、次節で両形式の共通性の検証も行うため、直説法未来と過去未来を別々に検索していく。

(2) Xx xx que (xx xx xx)  $V_{fut/con}$   
 検索箇所 context node span left 1-4 node

(2)ではまず中心語彙 (node) をすべての動詞の直説法未来/過去未来として、その前に従属接続詞 *que* が先行する文 (context) を検索する。Node と *que* の間に 0 語から 3 語の主語となる名詞句や副詞の存在を想定し、*que* を node の左 1 語から 4 語の間に設定する。Node は正規表現を用いて語尾検索し、SkE の Frequency 機能を用いて動詞以外の品詞や、頻度の高い *queremos*、*queria(m)*、*cria(m)* といった直説法未来/過去未来以外の形式を除外する。また、node と *que* の間で文が切れないよう、2 語間の”、”、”、”、”-”も Filter で除外する。ここで *que* に確実に先行する node の左 4 語から 6 語の間の語彙を Collocation 機能によって二次的に検索し、動詞だけをリストしていく。ただし、この場合 node の直前に *que* が現れた場合の左 2 語から 3 語の間を検索することができないため、(3)のような node と *que* の間を 0 語から左 1 語、リストする箇所を左 3 語から 2 語とする方法で補足した。以降、(2)の検索方法を node4、(3)を node2 と呼び扱っていく。

(3) Xx que (xx)  $V_{fut/con}$   
 検索箇所 context node span left 1-2 node

### 2.3.2. 直説法未来と過去未来の共通性について

直説法未来と過去未来の共起語は別々に検索したが、ここで、両者の分布を同じとしてよいのかという問題が生じる。直説法支持派も、第三叙法提唱派も、いずれも両形式を同一概念の非過去/過去形式として直感的に認めているが、客観的データ分析に基いた記述を目指す本研究においても両形式の共通性を直感的に前提としているのは問題である。そこで、ここでは 2.3.1 で得られた両形式の共起主節動詞語彙リスト (本稿では割愛) から、各上位 100 語の共通性 (各語彙の頻度の定量的関係性) を回帰検定 (有意水準 1%) によって検証する。回帰検定の手法については縄田 (2006, pp172-180) を参照した。両者の間に関係性が見られないことを帰無仮説 ( $H_0$ )、定量的関係性が見られることを対立仮説 ( $H_1$ )とする。回帰方程式は、

$$(\text{直説法過去未来と共起する主節動詞語彙}) = \beta_1 + \beta_2(\text{直説法未来と共起する主節動詞語彙})$$

となり、 $H_0: \beta_2=0$ 、 $H_1: \beta_2>0$  となる ( $\beta$  は「回帰係数」)。  $\beta_2>0$  を示すためには、検定統計量  $t$  が自由度 ( $df$ )  $n-2$  の  $t$  分布の有意水準  $\alpha$  に対応するパーセント点  $t_\alpha$  よりも大きいことを証明しなければならない (縄田, p. 177)。分析の結果は以下のとおりである。なお、各数値の計算は Microsoft Excel 2007 によって行った。

表 1 直説法未来と過去未来と共起する主節動詞語彙の回帰検定

検索方法	相関 $r$	検定統計量 $t$	$t_\alpha$	$p$
Node4	0.95	35.42	2.36 ( $df=131$ )	5.77E-69
Node2	0.92	28.09	2.35 ( $df=141$ )	1.27E-59

Node4、node2 両分析においても、検定統計量  $t$  は  $t_0$  よりも大きく、加えて検定統計量  $t$  が  $t_0$  値よりも大きくなる可能性 ( $p$  値) が棄却閾 (=0.01) 以下であることより、帰無仮説を棄却し、直説法未来と過去未来のそれぞれと共起する主節動詞語彙に共通性を認め、同質のものとする。

### 2.3.3. $v_2 + que + V_{pres/prct}$

次に、2.3.1 と同様の方法で、直説法現在、完了過去、未完了過去を node とする場合の node4、node2 における主節動詞語彙をそれぞれ検索する。

ただし、2.1 で触れたとおり、SkE のポルトガル語コーパスは品詞タグが貧弱であるため、表層形によって検索しなければならない。しかし、正規表現を用いて活用語尾で検索しようとする場合、ポルトガル語では規則動詞の -ar 動詞の直説法現在と -er/-ir 動詞の接続法現在、及び -er/-ir 動詞の直説法現在と -ar 動詞の接続法現在で活用語尾が重複してしまうため、両形式を区別せずに拾い上げてしまうという問題が生じてしまう。また、すべての不規則活用を入力すると SkE の処理時間が膨大になってしまう。そのため、ここでは node を *ser*、*ter*、*poder*、*estar*、*fazer* の頻度上位 5 語彙に限定して、各語彙ごとに現在、完了過去、未完了過去の活用形を入力して検索する。

## 3. 結果と考察

まずは分析の結果得られた全体的な頻度情報を提示する。なお、直説法未来と過去未来にはポルトガルとブラジルとの間で使用頻度の不均衡が見られたが、コーパス全体のポルトガル対ブラジル比が不明なため本研究ではこの点について追究しない。

表 2 直説法未来、過去未来と最頻出 5 語彙の直説法現在、完了過去、未完了過去の出現頻度

検索方法	直説法未来	直説法過去未来	直説法現在/過去				
			<i>ser</i>	<i>ter</i>	<i>estar</i>	<i>poder</i>	<i>fazer</i>
全体	177837	85021	781098	207444	194004	84624	66117
Node4	23323	16140	43621	26000	21757	9736	9970
Node2	40760	25501	76755	39502	34261	13685	15378

### 3.1. パターン→語彙

まずは Collocation 機能によって各パターンで得られた主節動詞リスト (本稿では割愛) から上位 100 語をそれぞれ抽出し、2.3.2 と同様の手法で、直説法未来 vs. 直説法現在/過去、直説法過去未来 vs. 直説法現在/過去のそれぞれの組み合わせで共起する主節動詞語彙の頻度の回帰検定 (有意水準 1%) を行い、それらの間の共通性 (定量的関係性) を検証していく。いずれも帰無仮説 ( $H_0$ ) は定量的関係性が見られないこと、対立仮説 ( $H_1$ ) は関係性が認められることである。両パターンの定量的関係性を示す回帰方程式を、

(直説法現在/過去の共起語彙の頻度) =  $\beta_1 + \beta_2$  (直説法未来/過去未来の共起語彙の頻度)

とすると、 $H_0$ は $\beta_2=0$ 、 $H_1$ は $\beta_2>0$ となる。

表 3 直説法未来と直説法現在/過去と共起する主節動詞語彙の回帰検定

検索方法	相関 $r$	検定統計量 $t$	$t_\alpha$	$p$
Node4	0.98	58.26	2.36 (df=197)	3.84E-126
Node2	0.91	32.57	2.34 (df=230)	6.37E-88

表 4 直説法過去未来と直説法現在/過去と共起する主節動詞語彙の回帰検定

検索方法	相関 $r$	検定統計量 $t$	$t_\alpha$	$p$
Node4	0.97	52.43	2.35 (df=189)	3.7E-114
Node2	0.91	31.50	2.34 (df=218)	6.66E-83

いずれにおいても検定統計量  $t$  が自由度  $n-2$  の  $t$  分布の有意水準点  $t_\alpha$  より大きく、加えて検定統計量  $t$  が  $t_\alpha$  値よりも大きくなる可能性 ( $p$  値) が棄却閾 (=0.01) 以下であることより、帰無仮説は棄却され、直説法未来、過去未来のそれぞれの主節動詞語彙と直説法現在/過去の主節動詞語彙との間に定量的関係性が認められた。これにより、構造的観点からの直説法未来/過去未来の直説法性の説明に用いられてきた主節動詞語彙の共通性は、実際の言語データの量的分析によっても支持されることとなる。

しかし、回帰検定における同質性は高いものの、データの散布図 (図 1-4、数値は対数で標準化) を確認すると直説法未来/過去未来と直説法現在/過去のそれぞれに偏って共起している語彙が多く見られた。次節では語彙リストを出発点とすることで異なった視点からの考察を試みる。

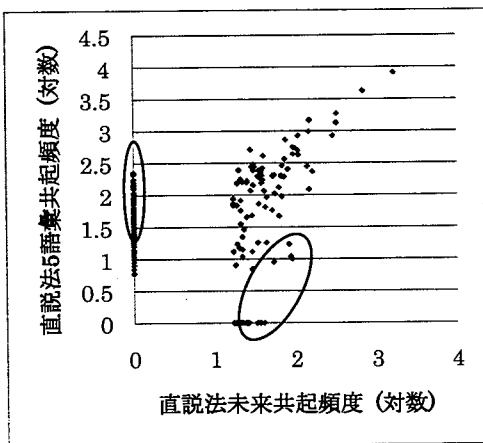


図 1 直説法未来と 5 語彙の直説法現在/過去との共起語の散布図 (node4)

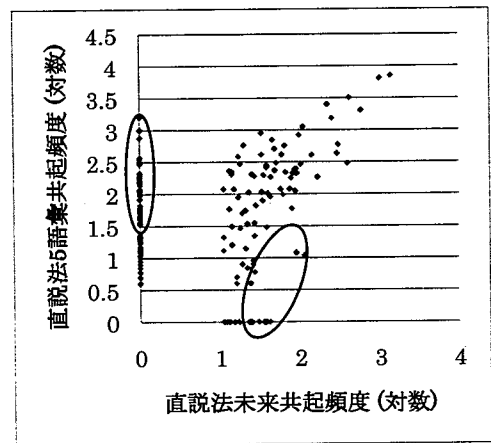


図 2 直説法未来と 5 語彙の直説法現在/過去との共起語の散布図 (node2)

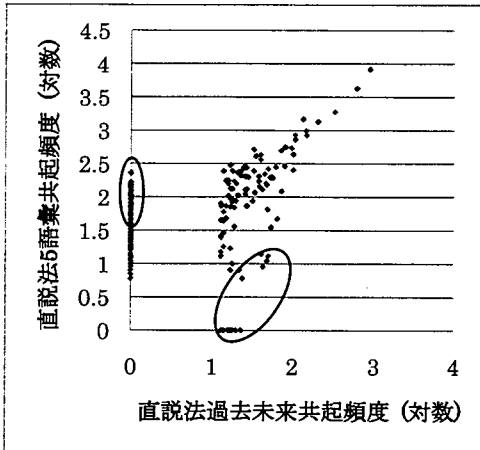


図 3 直説法未来と 5 語彙の直説法現在/過去との共起語の散布図 (node4)

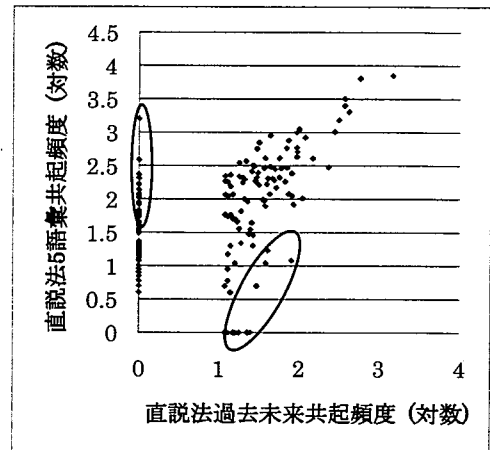


図 4 直説法未来と 5 語彙の直説法現在/過去との共起語の散布図 (node2)

### 3.2. 語彙→パターン

ここでは散布図に示されたような、直説法未来/過去未来及び直説法現在/過去のそれぞれと極端に結びつきやすい語彙を拾い上げる。SkE の共起語彙リストは頻度のほか、いくつかの統計的数値を計算してくれる。これらのうち、共起の強さを示す MI スコア (*mutual information*: 相互情報量) と、共起の確かさを示す LL スコア (*log-likelihood*: 対数尤度) を用いる。各共起語彙リストから MI スコア 3 以上、LL スコア 3.83 以上 (cf. Dunning 1993, Hunston 2002, McEnery et al. 2006)、頻度 20 を基準として語彙を拾い上げ、直説法未来/過去未来でのみ基準を満たす語彙群、直説法現在/過去でのみ基準を満たす語彙群、両パターンで基準を満たす語彙群を、それぞれと結びつきが強い語彙群として以下に分類した。

*adiantar, afirmar, antecipar, anunciar, asegurar, avaliar, avisar, calcular, decidir, definir, determinar, elaborar, estimar, garantir, imaginar, indicar, prever, prometer, reafirmar, sugerir, supor*

図 5 直説法未来/過去未来と結びつきが強い主節動詞語彙

*aprender, arrepender, comprender, concluir, concordar, constatar, convir, cumprir, demonstrar, descobrir, desconhecer, distinguir, dizer+se, elevar, esquecer, explicar, fingir, frisar, gostar, haver, insistir, julgar, lembrar, mostrar, notar, parecer, poder+se, provar, reconhecer, recordar, recordar+se, referir, repetir, responder, revelar, saber+se, sentir, verificar*

図 6 直説法現在/過去と結びつきが強い主節動詞語彙

*achar, acreditar, acrescentar, adiantar, admitir, afirmar, convencer, crer, declarar, dizer, entender, garantir, indicar, informar, pensar, saber, sublinhar*

### 図 7 直説法未来/過去未来、直説法現在/過去とも結びつきが強い主節動词语彙

さらに、Hunston & Francis (1999) に倣い、それぞれを V+*que* のパターンのコンコーダンスラインを確認しながら、いくつかの大まかな意味グループに分類した。分類は筆者のほか、ポルトガル語中上級学習者 2 名によって行われ、一部 NS の指示を仰いだ。

直説法未来/過去未来と結びつきが強い語彙は、「(新)<sup>5</sup>情報の提示、発表」(*adiantar, anunciar, avisar, definir, indicar, sugerir*)、「評価、見積もり」(*avaliar, elaborar, estimar*)、「予定、推測、想像」(*antecipar, assegurar, calcular, decidir, determinar, garantir, imaginar, prever, prometer, supor*) といったグループに分けられる。これらの語彙が *que* 従属節を後続するパターンのコンコーダンスラインの 50 例 (本稿では割愛) を SkE の Sample 機能から得て確認すると、約 2:3 の比で直説法未来/過去未来:直説法現在/過去と共起していた (e.g. *anunciar* 9:15, *garantir* 16:24, *indicar* 13:21)。直説法未来/過去未来と直説法現在/過去の母数 (全体で約 25 万語:5 語彙で約 135 万語) を考慮すると、これらの語彙は前者との結びつきが強いことがわかる。

直説法現在/過去と結びつきが強い語彙は、「情報の(再)<sup>5</sup>提示、主張」(*concluir, demonstrar, explicar, insistir, mostrar, provar, referir, repetir, revelar, verificar*)、「知覚、記憶/忘却」(*aprender, compreender, esquecer, lembrar, notar, parecer, reconhecer, recordar-se, sentir*)、「反応」(*arrepender, concordar, responder*) といった意味グループに分けられる。ここでも *que* 従属節を後続するパターンのコンコーダンス 50 例を確認すると、こちらの語彙はほとんどすべてが直説法現在/過去と共起し、直説法未来/過去未来を含めた他の形態素と共起する例は少数であった (e.g. 直説法未来/過去未来:直説法現在/過去 *provar* 1:40, *reconhecer* 2:30)。

最後に直説法未来/過去未来と直説法現在/過去のどちらとも結びつきの強さの基準を満たしていた語彙群は、「思考、真偽判断」(*achar, acreditar, crer, pensar*)、「情報の提示、主張」(*acrescentar, afirmar, convencer, declarar, dizer, informar, sublinhar*)、「知識、理解」(*saber, entender*)と、上記の 2 パターンと結びつきやすい語彙群の意味グループと部分的に重複するような形になった。ただし、これらの語彙はほとんどが両パターンのいずれの共起語彙リストにおいても上位 20 位以内に入る高頻度語であり、これらの語彙が 3.1 で確認された全体的な共通性に関係しているのではないかと考えられる。

各語彙でのコンコーダンスを記述しての詳細な質的考察は、本稿では紙幅の都合により差し控えるが、直説法未来/過去未来と強く共起する「評価、見積もり」、「予定、推測、想像」の各語彙の命題は「未実現」や「真偽判断」というような非直説法的な *Irrealis* (和佐 2005, etc.) の意味範囲にあり、あるいは当然ながら主節に対する時間関係が「未来」や「後続」の関係になる。一方で、直説法現在/過去と強く共起する「知覚、記憶/忘却」や「反応」の命題は実現された事実 (*Realis*) となり、時間関係も「先行」や「同時進行」



になることも容易に予測できる。これらの傾向は *Realis/Irrealis* の法対立とも、未来/非未来の時間対立ともとらえることができるが、こういった語彙の要素が直説法未来/過去未来と直説法現在/過去の主節動詞語彙に異なる傾向をもたらしているのであれば、両パターンと共起する主節動詞語彙はまったく同質とはいえ、構造的な特徴からの直説法未来/過去未来と直説法現在/過去の共通性の説明は妥当性を欠くと考えられる。

#### 4. 結論と今後の課題

動詞の補語となる従属節内における直説法未来/過去未来と直説法現在/過去は、統計的には共通の主節動詞と共起する傾向が見られ、直説法未来/過去未来を直説法とする伝統的な構造的説明を支持する結果が得られた。一方で、散布図やコンコーダンスラインから両パターンのいずれかと極端に結びつきやすい動詞語彙群が確認され、構造的説明の妥当性が疑われた。本研究は量的な分析にとどまっているが、得られたコンコーダンスラインの質的研究によって、主節動詞語彙及びパターンの時間的、法的性質をさらに明らかにしていくことが今後の課題である。

最後に、本研究にはいくつかの問題点や注意点があることを明記する。まず、3.2で行った共起語彙の意味分類は必ずしも厳密でない上、客観性に欠けている点である。主観的な分類は分類者によって変動するだけでなく、同一人物による分類でもいつ行われるかによって変動し得るものであり (Hunston & Francis 1999, p.86)、厳密に行うには評価者間信頼性の検定などを行わなければならない。

次に、コーパス分析によって得られた情報はサンプルの母集団や時代によって変化する可能性があるという点に注意すべきである。本研究の結果をもって結論とするのではなく、新聞以外の言語場面での出現例、あるいはポルトガルとブラジル、その他の地域での差異も考慮し、常に最新の言語情報の記述が求められるものであることを念頭に置かなければならない。

また、本研究では直説法未来/過去未来の従属節動詞としての限定的な姿しかとらえていないことも付け加える。両形式のより正確な使用を把握するには、主節や関係詞節での振る舞いや、共起する副詞語彙、聞き手との関係などといった言語内外の要素を考慮に入れた追研究が求められる。

#### 5. 注

本論は日本ロマンス語学会第48回大会(2010年5月23日 於慶應義塾大学)にて発表された内容に基く。語彙リストの意味分類に協力頂いた Eliseu Pichitelli 先生、大本淳代氏、則竹理人氏、統計分析について助言頂いた金田拓氏に感謝申し上げます。なお、本論の内容に関する責任はすべて筆者のものである。

- 1) 本研究においては東京外国語大学の投野由紀夫研究室が授業用に取得しているアカウントによって Sketch Engine を使用させて頂いた。SkE のウェブサイトは <http://www.sketchengine.co.uk/>
- 2) ヨーロッパ変種版: [http://www.clul.ul.pt/sectores/linguistica\\_de\\_corpus/projecto\\_rld\\_pesquisa\\_PE.php](http://www.clul.ul.pt/sectores/linguistica_de_corpus/projecto_rld_pesquisa_PE.php)  
アフリカ変種版:  
[http://www.clul.ul.pt/sectores/linguistica\\_de\\_corpus/projecto\\_rld\\_pesquisa\\_AFRICA.php](http://www.clul.ul.pt/sectores/linguistica_de_corpus/projecto_rld_pesquisa_AFRICA.php)

- 3) <http://www.linguateca.pt/>
- 4) <http://www.corpusdoportugues.org/>
- 5) コンコーダンスラインの文脈より。

## 6. 参照文献

- Alarcos Llorach, E. (1994). *Gramática de la Lengua Española*. Madrid: Espasa Calpe.
- Bello, A. (1847/1988). *Gramática de la Lengua Castellana, destinada al Uso de los Americanos (1)*. Madrid: Arco Libros.
- Castronovo, B. J. (1989). The Strange History of *-ria* Form. *Hispania* 72, 378-384.
- Cunha, C. e Cintra, L. F. L. (1984/2007). *Nova Gramática do Português Contemporâneo*. Rio de Janeiro: Lexikon.
- Dunning, T. (1993). Accurate Methods for the Statistics of Surprise and Coincidence. *Computational Linguistics*, 19 (1), pp. 61-74
- Fleischman, S. (1982/2009). *Future in Thought and Language*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Gili Gaya, S. (1943/1961). *Curso Superior de Sintaxe Español; 8. ed.* Barcelona: Publicaciones y ediciones Spes.
- Hunston, S. (2002). *Corpora in Applied Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hunston, S. and Francis, G. (1999). *Pattern Grammar*. Amsterdam: John Benjamin.
- Klein-Andreu, F. (1995). The Painless Subjunctive. In P. Hashemipour, R. Maldonado, and M. van Naerssen (eds). *Studies in Language Learning and Spanish Linguistics; in Honor of Tracy D. Terrell*, pp. 419-430. New York, McGraw-Hill Inc.
- McEnery, T.; Xiao, R.; and Tono, Y. (2006). *Corpus-Based Language Studies; an Advanced Resource Book*. London: Routledge.
- Oliveira, Fátima. (1985). O Futuro em Português: Alguns Aspectos Temporais e/ou Modais. *Actas; 1º Encontro Nacional da Associação Portuguesa da Linguística*, 353-374.
- Rojo, G. y Veiga, A. (1999). El Tiempo Verbal. Los Tiempos Simples. In I. Bosque y V. Demonte (eds). *Gramática Descriptiva de la Lengua Española*, 2, pp. 2865-2934. Madrid: Espasa Calpe.
- 寺崎英樹 (1998). 『スペイン語文法の構造』. 東京: 大学書林
- 出口厚実 (1986). スペイン語に「未来」はあるか? 同格化された法・時制概念をめざして. *Estudios Hispánicos* vol.12, 1-10. 大阪外国語大学スペイン・イSPANアメリカ研究室編.
- 縄田和満 (2006). 『Excel による統計入門 [第2版]』. 東京: 朝倉書店.
- 和佐敦子 (2005). 『スペイン語と日本語のモダリティ—叙法とモダリティの接点』. 東京: くろしお出版